山・職人・設計者がつながる。工務店も山・職人を支える。そして住まい手の要望にかなう家を提供する。

森林が国土を守っていることに関しては、論を待たないと思います。そして森林が荒廃している現状については、緑の列島ネットワークなどでずっと言い続けてきました。森林の木は使い切ることによって、大きな循環が生まれます。炭素を固定化するうえでも、木組みの家は有効ですね。しかし木は非常にクセのある自然の材料ですから、ねじれや反りなどをきちんと読み取って使っていく必要があります。

自然の材料は、そう簡単には完全にコントロールできません。だからこそ、職人がその眼力で読み取って、使い勝手のいいように加工してきました。しかし昔のような徒弟制度が崩れて、しっかりした継承者が育たない。それが（国交省の）大工育成塾が出てくる背景だと思いますが、むしろ若い人を雇う力がいまの職人にないという現状を何とかしないといけないと思います。

山も職人も、設計者とつながらないと住まい手に対してきちんと説明のできる家を、住まい手の要望にかなう家を導けなくなっています。あるいは工務店であれば、利潤追求のあまり山を叩く、職人を叩くということで、みんなを幸せにできない側面がある。工務店は職人の力を引き出し、支える側にまわってほしいと思いますね。それぞれが対等の関係で、これからはやっていくべきです。

伝統は地域の気候風土に根差した、地域の歴史のなかにある。そこと縁を切ってしまって本当にいいのか。

それには、社会的ルールが不可欠です。誰かが勝つ・負けるという勝負のルールではなく、対等の立場でみんなが共存共栄するためのルール。それは中央集権的な方法ではなく、地域の習慣とか気候風土とか、産業の成り立ちなんかを反映したものであるはずです。要は地元ががんばるためのしくみの再構築なんですね。伝統的な工法の見直しは、芋ずる式にそうしたしくみを引っぱり上げるんです。

例えば職人の仕事というのは、道具を使います。道具のなかには刃物があったりします。刃物の技術は鍛造の技術だったり、鉄をつくる技術だったりして、それぞれに携わって商いをしている人がいる。そう考えていくと、ものすごく裾野の広い世界が見えてきますよね。しかし工業化された住宅供給では、そうした裾野の広がりを引っぱり上げることができないんですね。

少し言い方を変えれば、伝統とは地域の気候風土に根差した、その地域ななかにもともとあるものです。でも、いまの家はそういったことが意識されていない。縁が切れてしまっている。例えば在来工法はどんどん簡便になって、伝統的な工法との違いが整理しきれていませんね。だから田舎の方に行くと、筋かいと貫がけんかしている家をたまに見る。これは大工のなかに、伝統的な木組みの感覚が残っているからでしょう。しかし構造的にはおかしなことになってしまう。

松井郁夫さんの最近のしごと

アトリエ棟の外壁は、建主が一枚一枚ていねいに焼いて仕上げた焼きスギの板

裏山の木を伐採して運びおろした丸太。これも建主自ら

松井郁夫建築設計事務所の設計、古民家工房の施工で今年完成した「あきる野の家（東京都あきる野市）」。現地に建っていた民家を再生し、別棟にアトリエを増築した。

再生された民家の居間。大黒柱は裏山のヒノキ

アトリエ棟の骨組みを支える丸太の梁、大黒柱も裏山の木

日本の家のスタンダードは職人の技が生きている手づくりの家

日本の家にはスタンダードがない。住まい手と共通の概念を持ち得ない。木の家をもっと開かれた世界にしたい。

日本の家にスタンダードはありますかと聞かれたら、きっとみんな困ると思うんですよ。武家屋敷では違うし、かといってメーカーハウスも違う。真の日本の住まいはどんな姿だろうという議論なしに、要素技術やデザインの議論になってしまうから、住まい手ともに共有の概念を持ち得ない。山の話をわかっていただいたと思っても、いざ住む段になるとエネルギーをたくさん使う設備を持ち込んだりする。そんなことも実際は多いわけです。

「木の家」というのは日本の家、手づくりの家、職人の技が生きている家です。そういう家をつくらないと、どんどん日本の元気がなくなってしまう。そしてそういう家をずっと大事に使ってもらえるようにしないと、地域の大工が手をかけてメンテナンスし続けられるようにしないと、いけないと思います。○○ホームというビルダーが倒れたらあとは知りません、そんな家ではおかしいじゃないですか。

またそういった家づくりが積み重なっていくと、だんだんと美しいまち並みの形成にもつながるはずです。伝統的なものへの共通の理解が形成されたうえに、技術やデザインがのってくることになるはずですから。その意味でも、木造の世界を細かな技術論、デザイン論に追い込まないようにしたい。みんなの共存共栄のために、もっと開かれた世界にならなきゃいけないと思います。

松井郁夫さんへの取材にもとづいて構成しています。文責・編集部